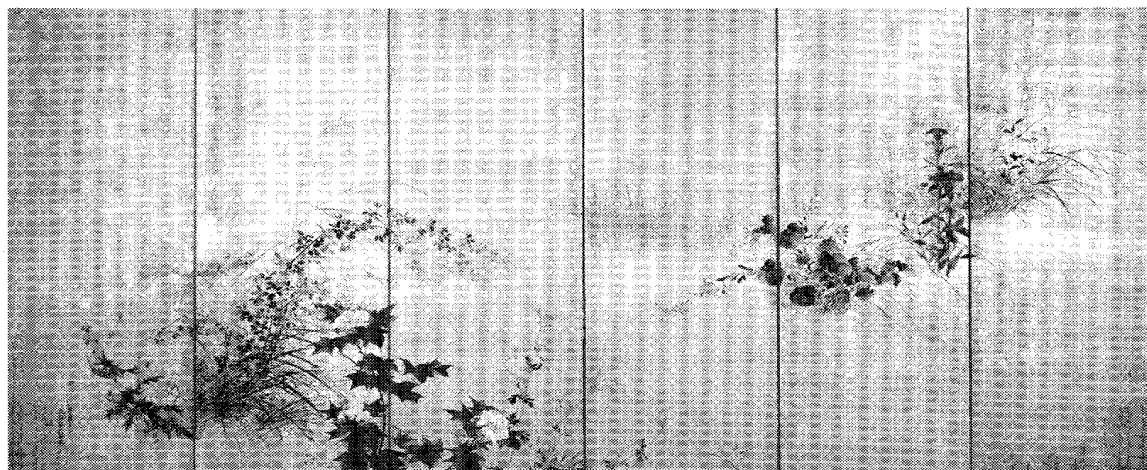


表紙作品解説



秋草図屏風 六曲一隻

明治38年(1905) 172.0×384.0cm

絹本金地著色 跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

身近な草花を題材に描いた跡見花蹊66歳の時の大作である。

葉の色も鮮やかに大輪の花を咲かせる芙蓉を中心に、藤袴ふじばかまと女郎花おみなえしがこれを包み込むように弧を描いている。藤袴の周りには薄すすきと撫子なでしこが配置され画面に広がりを与えている。一方画面右側は芙蓉に向かい葛くずが花を伸ばし、鶏頭けいとうと桔梗ききょうが奥行きを形づくっている。この作品では通常秋の七草で数えられる萩を省略し、白い花—芙蓉と赤い花—鶏頭を加え、彩り豊かに表現している。

跡見花蹊は屏風の持つ効果を熟知していた。芙蓉を手前に、藤袴と葛が後方からせり出す独特の立体感、非対称な構図の妙と相まって、観る者を秋の風景の中に誘う。ここには枝をゆらし草をさざめかせる秋風も存在している。しみじみとした情感あふれる空間である。

写真提供：跡見学園女子大学花蹊記念資料館

文：学芸員 渡辺 泉